

広島大学大学院文学研究科論集 第七九卷（二〇一九年十二月）別刷

菅原道真仮託歌集 『瑠璃壺之詠歌百首』（架蔵・卷子本）

— 翻刻と解題 —

妹尾好信

菅原道真仮託歌集『瑠璃壺之詠歌百首』（架蔵・卷子本）―翻刻と解題―

妹尾好信

〔キーワード〕 菅原道真仮託歌集 瑠璃壺之詠歌百首 菅家瑠璃壺和歌 菅原道真 帽山元賢

〔凡例〕

一 いわゆる菅原道真仮託歌集の一伝本である架蔵の『瑠璃壺之詠歌百首』（卷子本・1軸・享保十四年〔一七二九〕写）を翻刻し、解題を付した。

一 翻刻にあたっては、次のような処理を施した。

1 変体仮名はすべて現行の字体に改めた。漢字については、できるだけ原本の字体を尊重したが、特殊な異体字は通行の字体に改めた。

2 和歌は、底本では散らし書きにされているものが多いが、翻刻では句順を検討した上で1行に記した。その際、各句ごとに1字空白を置いた。但し、97・98番の両首については、原本の表記を再現した上で後の括弧内に句順に従った表記を示した。

3 71番以降の歌に存する左注については、底本通りの改行とは

せず、適宜追い込みにして記したが、底本の改行箇所には／を付した。

4 序にあたる前書、跋にあたる巻末の識語・奥書、系図に関しても、前条と同様の処置をした。

5 底本には虫損のため判読不能な文字がいくつか存する。その場合は□で表記し、右傍に括弧して想定される文字を記した。

6 底本の誤写と考えられる箇所には、他本を参照して右傍に想定される文字を注記した。

7 前書にある朱引と、和歌の初句を示す小さな朱の丸印は省略した。

一 各歌の頭に私に通し番号を付した。また、和歌の下の括弧に、竹井和人氏による龍谷大学図書館蔵写字台文庫本の翻刻（『中世和歌の文献学的研究』所収）に付された歌番号を併記した。

〔翻刻〕

百首

瑠璃壺之詠歌百首者。

菅相公。政事餘暇。興詠吟嘯。而自的心／物艸稿。納瑠璃器。昌泰年中。左遷之／時。又携一器下筑石。隨見興已作觸／聽。而感自生之和歌百首。改以入壺／中。

聖化上天之後。度會神主。飛鳥春彦。有／故給瑠璃壺矣。春彦者飛鳥冬綿。同／胞之弟度會大神主高主子。白太夫／是也。與

菅聖友善。筑石左遷之時^{〔下〕}。

聖化後。隱京師。事果而神上焉。

菅相公神靈輝天下。北野宮祠。／稱 聖廟。天滿大自在天

神之尊／號者。現靈神而。奉幣祭典。住吉／八幡 北野 三

所者。現形而雖／交人間威德等。

天神者。異諸社。於 禁中。定精進日。同／觸穢。北野之外。古

代無其例。當世／住吉 八幡。祭禮等有所遺。

現靈神之稱號。秘事也。天子自精^{〔下〕}而御信心。日日新者。

天滿宮爾。抑 現人神之事。三所之外。／無由緒。

菅家寶藏中。聖作神詠。傳在也。爲／尊詩文。而和歌少也。

此瑠璃壺百首。道真無盡經也。金玉／中。三十首爲秘歌。唯慕久

而得求。有／因緣師授宜叶

聖意叨莫落凡情見解。信仰之輩。拓香／禮拜唱。隨志

神詠。天感應護。而忽成諸願。急々如律／令

1 ふりそは、ふかくはならし 中く／に 下より消る 春のあ
はゆき (1)

2 かすみても 月やあらめと 思ひより 我身ひとつは 涙なり
けり (2)

3 佐保姫か かさしのかつら かけてこそ なかき日に咲 花は
みえけれ (3)

4 ちるまゝに 青葉にしける み山邊の 梢やうすき 花のしら
□^{〔下〕} (4)

5 うきときや こゝろのたねと なりぬらん 白雲かゝる 小田
の苗代 (5)

6 浮世遠波 秋農山風 幾賀之登天 雲古曾月能 隠家尔那礼
(6)

7 かたりてや 家つとにせむ 一枝も おるをゆるさぬ はなの
かへるさ (7)

- 8 吹よはる かせをうらみて 木かけより ほかにはふらぬ 花
のしら雪 (8)
- 9 散るはなを 薪のうへに 吹かけて あらしをおはぬ 山人も
なし (9)
- 10 宵のまに 咲そふはなの 雲見えて 川上かすむ あけかたの
そら (10)
- 11 行水の 中の小鳥の 川柳 なみのもて來し まゝにうえけむ
(11)
- 12 明ほの、いつくさかいと かすむらむ はなのあなたの 峯
の松はら (12)
- 13 川音は 霧消しより とたえして 風のかけたる はなのうき
はし (13)
- 14 ふしのねは 雲より上に 影出て 棊の水に なるさはの月
(14)
- 15 松風の 音をいかてか うつむへき つもらてそふる 月のし
- らゆき (15)
- 16 みよし野、桜を海と みつしほに 花の見るめを かつく山
人 (16)
- 17 □^誰かかたに わきてぬしとや にはふらん 中垣に咲 梅のは
つ花 (17)
- 18 さとまでは ふりもつもらぬ 初雪を 筏にのせて 下る柚人
(18)
- 19 朝ほらけ はまなのはしは とたえして かすみをわたる は
るの旅人 (19)
- 20 たかね山 ふもとのくらき あけほのに 霧の上行 秋のたひ
人 (20)
- 21 影うすき 夕日の名残 波そめて くれないたゝむ 八重のし
ほかせ (21)
- 22 ともすれは 身はうき草の あやめくさ 引れやすきや 心な
るらむ (22)

- 23 さそはれて 此宿までは 月に來つ さのみはいか、 夜も更
にけり (23) 地 (30)
- 24 捨てこし 身にともなは、 月もなと むかしの秋の 思はさ
るらん (24) 波 (31 a)
- 25 吹よはる 風よりはる、 むら雨の 世は定なき ものとしら
すや (25) 32 花染に かすみの袖は なりにけ^り □ 雲のころもの さくら色
にて (31 b)
- 26 人のもつ 薪の上に 雪を見て 山のさむさを おもひこそや
れ (26) 33 名にさける 梅津のさとの いかなれは 風のふけとも には
- 27 忘れては たそとい、けり よもすから あらしのた、く 柴
の戸ほそを (27) 34 まつかせの かすみの窓を あくる夜に 月さへにほふ 梅の
なつかし (33)
- 28 俵を かすみの袖に こめかねて むめのにほひは かせのた
きもの (28) 35 月のきる かすみのころも ほころひて はなのはたえの し
ろく見えけり (34)
- 29 降る雨は 雲より外の 名残にて 嵐にはる、 月のうきふね
(29) 36 ふしのねの たちそふ雲の 靡くらむ さのみはいか、 烟な
るらし (35)
- 30 落稚は あらしをのする 車にて 秋のみゆきは 月のみやま
をふもとにて (36) 37 こと山の ならへるにあまる ふしのねは 雲よりう□^は な

- 38 玉くしけ はこねの宮井 かくれなく 見あけて久し 月のう
みつら (37)
- 39 水鳥の はやきなかれに さそはれて たえぬも聲の 遠さか
り行 (38)
- 40 夢さそふ 軒端の萩の 風の音に こいしき秋の ねさめなる
らむ (39)
- 41 しるへせし 軒端のをきの 風もたえ わかれに秋の つれす
ともよし (40)
- 42 夜もすから ひかぬなるこの 聞ゆるは 月をゆるかす 風の
うきなみ (ナシ)
- 43 磯山に 峯のまつかせ めくりきて 波やひくらむ からこと
の音 (41)
- 44 嶺に見る 雪もふる野に とをからす 月の寒さや 風の松原
(42)
- 45 旅人の 馬さへきなる たまり水 あなうの花の 月さはくな
- り (43)
- 46 やとりそひ 山下水に かけうつす 桐のかはりに はひろの
柏 (44)
- 47 常盤木と なに思らむ これほとに 雪のはなさく 松のえた
さし (45)
- 48 吹保登波 楚禮土聞衣之 音絶天 嵐遠埋無 雪濃松原 (46)
- 49 おとゝしも 去年もことしも 咲はなの その□ちきりと た
れかいひけん (47)
- 50 しくれてや 中〳秋を 残すらむ もみちにわかぬ みねの
松はら (48)
- 51 よしこゝろ 思ひもはてよ 捨てこし 身のかへるへき むか
しならねは (49)
- 52 ちりそふる 花の木の間の 春かせに いてつる月や おほろ
なるらん (50)

- 53 よしなくも 命にかえて おもふなよ 我か身の為に 鶯のこ
ゑ (51)
- 54 も、しきの 木、にまきれぬ 花咲て ともしの中の 人も恋
しき (52)
- 55 あちきなや たとへはおもふ ことのみな 叶へたりとも 夢
の世の中 (53)
- 56 数ならぬ 身ほとこの山の おくはなし 人とはぬを かくれ
かにして (54)
- 57 吹あけて 空に花もつ あらしこそ 雲の梢を 風つとふなれ
(55)
- 58 さみたれの しのたのもりの かけしけみ 空にしられす ふ
る雫かな (56)
- 59 もろこしを 幾重か雲の へたつらむ とらのときまで 出ぬ
月かけ (57)
- 60 静なる 深山のおくも なかりけり もとのこゝろを つれて
- 61 山人の 笠も薪も うつもれて 雪こそくたれ 谷のほそみち
きつれば (58)
- 62 ふりつみて ふねとは見えぬ 松かけに 雪をそつなく うら
のあま入 (60)
- 63 隔つる 竹の一むら ふりしきて 隣を見する 雪のあけほの
(61)
- 64 をのつから 木かけにつもる 落葉こそ かせのとりたる 薪
なりけり (62)
- 65 うらさとの 浪のよれかし しほくみて 月をそになふ あき
の海士入 (63)
- 66 かけうつす 浪を磯邊に ふきよせて 月も岸うつ あきかせ
の聲 (64)
- 67 よもすから 嵐に窓を たゝかれて あくれば庭の 木の葉な
りけり (65)

68 ふけはこく よはれはうすき 梅か香の あらしにのこる 夜
半の手まくら (66)

69 行すゑも いそかれなから ともすれば 都に帰る 我心か
な (67)

70 世の中の うきをならひと いふ人や いとはしとての こ、
ろなるへし (68)

秘歌三十首

71 朝ほらけ 須戸うら船は みえずして かすみにまかふ そら
の松原 (69)

心つくしの御舟にめされし時／海原のあけかた霞てわきか
た／ければ前途さためかたく／生涯わきまへかたしと演／
て情分より出たる御哥

72 はたつらに あらしをうしと おもひなは 吹ぬまにこそ 花
は散けれ (70)

73 咲そえて それともみえぬ かつらきの はなのよそなる 峯
のしら雲 (71)

高加茂事代主命の／かむいさをしをよみ給ふ

74 明わたる 志賀のはままつ ほのくと さ、波かけて たつ
かすみかな (72)

唐崎の神垣を／志賀のはま松と申也

75 月たにも もらぬみ山の 下條に いつふる雪の まより残ら
む (73)

76 いにしへは 春のならひに みし月の なみたに霞む 老は來
にけり (74)

生老病死の中に老ライタハル／コト和哥の情分□述懷ノ第
一／是ニアリトハ／昔／聖ノ御辭

77 もしほくむ 涙のはまの あまころも ぬれそふ袖や さみた
れのころ (75)

涙ノ濱蟹衣／筑石ノ歌枕ニ非ス／始テ詠サセ給フ奥意アリ

／春彦能ク聞ケリ

78 ものゝふの 矢田野に生る 土筆は 弓と筆とを 取合けり

返照常理

(76)

79 いつの日の いつの時にとか むすかたふへたるき 命そや人の ははてもし
るらん (77)

マヅ、この
クマニススリシシ

産霊神事ハ

ケキヤウアラ
現形阿羅

フルアマノミコト
布留天命也

硯ノ利生ス、ロニテ／住吉太神／御影寫／ラセ候也

80 人しれす かゝるうき名の 立ぬるは ちりや硯の うへをふ
きけん (78)

神佛さへ／息を屏／事成に／凡心穢ノ息ヲフクコト恐ルヘ

シ／教誡

81 枝イにふる 雨そ木すゑの 葉を生天 ちらぬこそ花の 命るなりけ
り (79)

アソシキ
天育あるといふ心なり

82 足イ曳布の 更科山の ゆふ立に 雲の衣は あらはれにけり
(80)

哥枕ノ躰モ常ニ非ス

83 山あるの あしたの霧は 海に似て なみかと聞は まつかせ

の音 (81)

天拝嶽ノ朝氣色／心目モスミ／ワタル目前／ノ躰愁レトモ／
聖意ハ／不可向

84 夏もなを 雪見るふしの やまかけは 煙の末に 明やすき月
(82)

御哥躰／やまひめもまのあたり／現れぬへき神詠也

85 なかしふる 身はうきくさの 根を絶て 鳴ぬ間そなき 水と
りのこゑ (83)

つくしは冬の夜水鳥の／さそふ聲につけて／御目覚かちな
るを／春彦さけり

86 むらさきの 花なき時も 野をみれば 萩の戸あけし ふしつ
ほのあき (84)

藤壺ノ秋を／思遣ツ、／御詠吟尤哀深シ

87 中ノに ふきしくときは をとたえて よはれはそよく 萩
のうは風 (85)

88 老て聞は いかてうからん いにしへを おもはぬたにも を
きのうはかせ (86)

89 なきぬらす 袖にはいか、やとるへき くもりならはぬ 秋
の夜の月 (87)

90 山の端にの 雲の衣を ぬき捨て ひとりや月の すみのほらら
む (88)

91 ころは秋 時は夕くれ 身は老つ なに、なみたの おちとま
るへき (89)

菌化シテ／只盤ノコトク腮ヲ机ニ／モタセケレハ額ニカ、
セ玉フ

92 はらくと 霰降屋の 板ひさし 苔むすかたは 音もきこえ
す (90)

返照常理

93 わかかけに 勝る入江の つなかれて こゝろの駒に 身をそ
のせたる (91)

94 あつさ弓 柳のいとも 花咲し みる月かけに かすみうこか
す (92)

征西將軍ノ故事ヲ／書セ給時ノ詠歌に

95 春風のおとつれなから あやしけれ 垣ねのはなも 香ほり
そひつ、 (93)

文字又章子神代ヨリ古人也

96 花も見む すき人ならば 梅のゆの このみのたねを わりて
すつるな (94)

教誡ノ中神秘ノ至極也

古今誹諧和歌

ものをしふひとの
すきみのいらん

ら む

97 む さ の
す き も

め き 身

の と の

の て な

み ひ と

は の れ

の い ふ

な 後 速

(むめのはな さきての後の 身なれ速はや すきものとのみ ひと
のいふらむ) (95)

98 なてしこの

うすくもこ

くもひくな

れは見むひ

とわきてお

もひさため

よ

（なてしこの うすくもこくも ひくなれは 見むひとわきておもひさためよ（96）

99 心こそ かはらすとても せめて世に しられぬほと 山さ

ともかな（97）

100 ことはりを よそになしては する人の 我身のとかに など

まよふらむ（98）

瑠璃壺秘歌三十首は

菅聖公御心のよりとてありて人の為に准らへ／教ゆへししかあ
れとも／調かすかに曲高情こもれり／昌泰のあわれなる年に／い
たりては現影已にあまねく／おふる時なりとなみく／ならず／世
はなれたる神ことをのみおこ／なはせ給ひ雲かくれの後
天満天いたらぬくまもなし／光のまへに神かたちをあら／はし給ふ

春彦のみまさしう／逢たてまつりけり末の世

天神の御哥とて残れるはおく／夢うつ、に告させ給ふ

か、らくのはつせの／寺のほとけこそ北の、／神とあらはれにけ

り

唐ころもかけし北野、／神こそは袖に／もちたる梅にてもしれ

かうようのたくひ多し

聖化昇天の後も跡を垂てあま／ねく世の為に大慈大悲の／御名を残
し給ひて

南無天満天神と唱へ奉る／夫のみならず文才風雅

荒人神と敬うも日のもと／百代の末にあら人神といわれんは／我な

りとして月雪に現形／し給ひ詠哥を唱ふる時は心に

天神をあかめかたちやすらかに／して一首を詠せん人には／影身に

そはんとの御ちかい／春彦よくきけり

寛治二年

二月廿五日 大蔵頭為長

三本正二位

菅家二位為長系圖

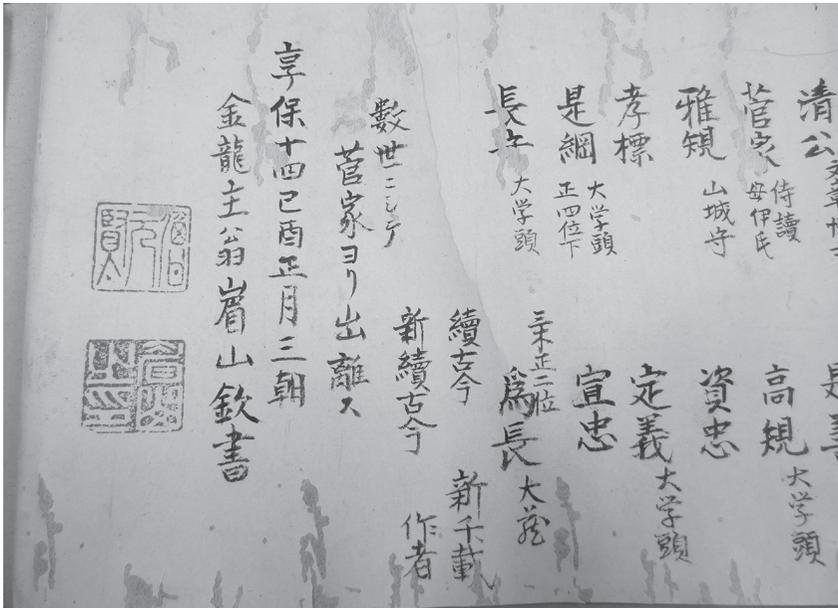
宇庭阿波守 古人 遠江守

天平元賜菅原性（つゞ）

清公 文章博士 是善 文章博士

菅家 侍讀 高規 大学頭

雅規 山城守 資忠
 孝標 定義 大学頭
 是綱 大学頭 宣忠
 正四位下
 長守 大学頭
 三木正二位
 爲長 大藏
 續古今 新千載
 新續古今 作者
 數世ニシテ
 菅家ヨリ出離ス
 享保十四己酉正月三朝
 金龍主翁峯山欽書
 印 印
 (僧元賢) (肩山之印)



本書 卷軸部分

〔解題〕

ここに翻刻したのは、架蔵の卷子本『瑠璃壺之詠歌百首』1軸で、中世から近世にかけて多数作られた菅原道真仮託歌集の一伝本である。はじめに書誌を記す。

写本。卷子1軸。縦約一九〇cm、長さ約一一m。巻末に、「享保十四己酉正月三朝 金龍主翁岨山欽書」との書写奥書があり、享保十四年（一七二九）一月、「金龍主翁岨山」なる人物による書写であることが知られる。全体に虫損が進んでいるが、近年丁寧^ニに全面裏打ち補修がなされており、本文の判読に大きな支障はない。補修時に緞子張りの表紙が付けられているが、題簽に外題は書かれていない。内題もないが、巻首に置かれたやや長文の前書の冒頭に、「瑠璃壺之詠歌百首者」云々とあるので、書名は『瑠璃壺之詠歌百首』であることが知られる。

書名に「百首」とあり、前書の後の歌集冒頭にも「百首」と記されている通り、本書は百首の和歌を載せている。しかしながら、四季・恋・雑のように部類されたいわゆる百首歌ではない。詞書を持たない和歌が七十首続き、その後「秘歌三十首」として別に括られた和歌三十首を加えて百首となる。この三十首には、多く和歌の後に左注の形で詠作事情や和歌の内容についての説明書きが記されているのが特徴である。

和歌は独特の散らし書きがなされたものが多く、中には歌句の順

が分かり難いものもある。底本には、和歌の冒頭に朱で小さな丸印が付されており（翻刻では省略）、中には歌句順が不確かなものも存する。

「秘歌三十首」が終わると、「瑠璃壺秘歌三十首は」で始まる識語のような文章があり、この文章中には、天神の詠歌として、「か、らくのはつせの寺のほとけこそ北の、神とあらはれにけり」「唐ころもかけし北野、神こそは袖にもちたる梅にてもしれ」の二首の歌を載せる。末尾に「寛治二年二月廿五日 三木正二位大蔵頭為長」とあって、この歌集の編者が菅原為長なる人物であることを記す。続けて「菅家二位為長系圖」を載せ、為長が道真から十代目の子孫であることを記すが、夙に武井和人氏が後掲書で指摘されたように、堀河天皇の御代である寛治二年（一〇八八）に該当する人物はおらず、これは極めて信憑性の低い奥書と言わねばならない。

書写奥書に見える「金龍主翁岨山」は、河内国出雲井郡（現在の大阪府枚岡市）にあった黄檗宗の寺院、金龍山神護禪寺（明治四年（二八七二）に廃絶）の二代目住持、岨山元賢（生没年未詳）。京都の門跡寺院宝鏡寺が蔵する『妙法天神経解釈』（享保十五年（一七三〇）成立）の著者として知られる。岨山については、小峯和明氏編『^{宝鏡}妙法天神経解釈』全注釈と研究（平成十三年 笠間書院）に収められた渡辺麻里子氏の論考に詳しい。本書奥書の署名に添えて捺された「僧元賢」「眉山之印」の陰陽刻二種の方形朱印は『妙法天神経解釈』の自叙末にもある。

道真仮託歌集の類の伝本を博搜して分類・整理された竹井和人氏の研究（菅原道真仮託家集・百首歌研究序説「中世和歌の文献学的研究」〔平成二年 笠間書院 所収〕）によれば、本書は、氏がA系統と名付けられた「寛治2年菅原為長奥書本系統」に属する伝本であることが明らかである。武井氏は、同系統の伝本として、

①東北大学附属図書館狩野文庫蔵『天神御独吟』（四・一〇七三六）所収「瑠璃壺之御詠誦百首」宝暦三年腰越与兵衛写。

②龍谷大学附属図書館蔵「菅家瑠璃壺和詠」（九一・一三・七四）写
字台文庫旧蔵。江戸中期写。

の二本を挙げられ、②龍谷大学本を底本にして全文を翻刻され、①東北大学本を校合に用いておられる。

この二本以外に、現在までに次の二本の存在が知られている。

③実践女子大学山岸文庫蔵『菅公家集』（三五三・六七三）所収「瑠璃壺之御詠誦百首」。（※久保貴子氏「山岸文庫蔵「菅原道真家集類」に関する一考察」『実践国文学』第40号（平成三年九月）において紹介されている。）

④富山市立図書館山田孝雄文庫蔵『菅家御獨吟御連歌／瑠璃壺御詠歌百首付誦諧歌』（5466・W911・2ーカ3424）所収「瑠璃壺之御詠誦百首」。（※同図書館のホームページにて画像が公開されている。4・6～9番歌が17番歌の後にあるという乱れがある。）

本書は、同系統の伝本として五番目に知られた本ということになる。本書の最大の特徴としては、唯一の卷子本であることが挙げら

れるが、書写年次のわかる本としては、東北大学本の宝暦三年（二七五三）よりも二十四年前の書写であり、最古写本であること、書写者のはっきりしていること、龍谷大学本とともに他書（別の道真仮託歌集類）と合写されていない単独写本であることも特徴に挙げられよう。

前述のごとく、本書の歌数は書名の通り百首である。ところが、龍谷大学本は、武井氏の翻刻によれば九十八首である。本書と比べると、32「花染にかすみの袖はなりにけ□雲のころものさくら色にて」と、42「夜もすからひかぬなるこの聞ゆるは月をゆるかす風のうきなみ」の二首が欠けている（翻刻では、32は32bとして東北大学本で補われているが、42がないことに関しては言及がない）。両首とも①東北大学本にも④富山市立図書館本にも存在している（実践女子大学本は未見）ので、明らかに龍谷大学本の欠脱である（武井氏は「東北大学本も九八首」と書かれているが、誤りである）。

本書の翻刻にあたって、龍谷大学本を底本とした武井氏の翻刻に対して歌句の順序等を変更した箇所を挙げておく。

- 20 明くれに霧のうへ行たかねやまふもとのくらき秋のたひ人
↓20 たかね山ふもとのくらきあけほのに霧の上行秋のたひ人
- 28 俵をかすみの袖にこめかねてにほひはかせのむめのたきもの
↓28 俵をかすみの袖にこめかねてむめのにほひはかせのたきもの

- 36 ことやまのしらへにあまるふしのねもみあけて久し月のうみ
つら ↓37 こと山のならへるにあまるふしのねは雲よりう□は
なをふもとにて
- 37 玉くしけはこねの宮にかくれなく雲よりうへはなをふもとに
て ↓38 玉くしけはこねの宮井かくれなく見あけて久し月のう
みつら
- 40 しるへせし軒はのをきのよもすからかせもたえよしわかれに
秋も ↓41 しるへせし軒端のをきの風もたえわかれに秋のつれ
すともよし
- 44 桐の葉よはひろの椎^椎かけうつす山下水にやとり所か ↓46 や
とりそひ山下水にかけうつす桐のかはりにはひろの柏
- 55 ふきあけて雲の梢をあらしこそ雲にはなもつ風つたふなれ
↓57 吹あけて空に花もつあらしこそ雲の梢を風つとふなれ
- 94 梅の句のすき人ならば花も見むこのみのたねをわりてすつる
な ↓96 花も見むすき人ならば梅のゆのこのみのたねをわりて
すつるな
- なお、本書には、後半「秘歌三十首」の中の四種の和歌について、
本文の右傍に異文注記がなされている。まず、次の二首である。
- 79 いつの日のいつの時にかむすふへき命や人のはてもしるらん
81 枝にふる雨そ木すゑの葉を生天ちらぬそ花の命なりけり
- 他に、82の初句「足^{あし}曳の」と、90の初句「山の端^{はた}の」がある。わ
ずか四首ではあるが、他本と校合された跡である。現在知られてい

る伝本では、龍谷大学本・東北大学本・富山市立図書館本の三本は
すべて底本の主本文と同じであり、どのような本によつて校合され
たのかはわからない。

〔他本との本文異同〕

残りの紙数を使つて、底本と他伝本との本文異同を掲げておく。

単純な仮名遣いの相違や、意味の変わらない漢字と仮名の表記の違
いなどは原則として省略した。校合した他伝本三本の略称は次の通
り。龍谷大学本については、便宜上、武井氏の翻刻によつた。

（龍）… 龍谷大学図書館 写字台文庫蔵本

（東）… 東北大学附属図書館 狩野文庫蔵本

（富）… 富山市立図書館 山田孝雄文庫蔵本

〔前書〕（※龍谷大学本ニハナシ）

〔巻首題〕—瑠璃壺之御詠百首（東）▽瑠璃壺之詠歌百首—

—瑠璃壺之御詠歌百首（東・富）▽餘暇—餘暇（富）▽自—自

ラ（富）▽的心物—取的物（東）・取^テ的物ノ（富）▽瑠璃壺矣

—瑠璃壺（東・富）▽春彦者…白太夫是也—〔割書〕（富）

▽□下—随下（東・富）▽天神者—天神（東・富）▽異諸社

…同觸穢—〔割書〕（富）▽觸穢—觸穢荒人神也住吉八幡（東・

富）▽祭禮—八幡之祭禮（東・富）▽精□—精進（東・富）▽

現人神—荒人神（東・富）▽傳在也—傳也（東・富）▽而和歌

- 1 矣和歌(東)・矣和歌者(富) ▽盡経也……唯―ナシ(富)
 ▽得求―不得求(東) ▽聖意叨―聖意ニ叨シキリニ(東)・聖意ニ
 叨ニ(富) ▽而忽―忽而(東・富) ▽百首―ナシ(東・富)
- 2 思ひより―思ひよる(龍・東・富) ▽ひとつは―ひとりは(東・
 富)
- 3 佐保姫か―佐保姫の(龍)
- 4 ちるまゝに―散まゝの(龍) ▽しら□―しら雪(龍)・しら雲
 (東・富)
- 5 小田―山田(龍)
- 7 かたりてや―かたりてて(富)
- 8 吹よはる―吹かはる(龍)・吹かはる(東・富) ▽うらみて―
 たのみて(龍)・うつみて(東・富) ▽しら雪―しら雲(龍・東・
 富)
- 9 おはぬ―おはむ(龍)・おはん(東・富)
- 11 もて来し―もて来て(東)・もて来て(富) ▽まゝに―まゝく
 に(東・富)
- 13 霧消しより―霧消し(龍) ▽うきはし―うきは□(龍)
- 14 桮の水になるさはの月―さはのみ? □麓の水になる(龍)
- 15 しらゆき―しら雲(龍・東・富)
- 16 みつしほに―みつしほの(龍)
- 17 □かかたに―誰かために(龍)・誰ために(東・富)
- 18 下る―下す(龍)
- 20 (和歌全体)―明くれに霧のうへ行たかねやまふもとのくらき
 秋のたひ人(龍) ▽あけほのに―明くれに(龍)・明更に(東・
 富)
- 21 影うすき―かけうつす(龍・東・富)
- 23 いかゝ―いかし(富)
- 26 上に雪をみて―上を雪に見て(龍・東・富)
- 27 いゝけり―いひつる(龍・東・富)
- 28 むめのにほひはかせのたきもの―にほひはかせのむめのたきも
 の(龍)
- 29 雲より―雲の(龍)
- 30 秋のみゆきは―のるもの見れは(龍)・秋の物見は(東・富)
- 31 夜の―江の(龍)・日の(東・富) ▽かけていて、―かけていて(東)
 (和歌全体)―ナシ(龍) ▽花染に―花ぞむる(東・富) ▽袖
 は―袖の(東・富) ▽なりにけ□―なかりけり(東・富)
- 32 は―袖の(東・富) ▽なりにけ□―なかりけり(東・富)
- 33 さける―さはる(東・富)
- 35 はたえの―はたへの(龍・東・富)
- 36 靡くらむ―靡くらん(富) ▽烟なるらし―烟なるらん(龍)
- 37 ならへるに―しらへに(龍・東・富) ▽ふしのねは―ふしのね
 も(龍・東・富) ▽う□は―うへは(龍・東・富)
- 38 宮井―宮に(龍)
- 39 聲の―音の(龍・東・富)
- 40 こいしき―うへ置し(龍・東・富)

- 41 夢さそふ—夢さそふしるへせし（富）▽風もたえわかれに秋のつれすとも
よし—よもすからかせもたえよしわかれに秋も（龍）▽秋の—
秋も（東・富）▽つれす—よらす（東・富）
- 42 「和歌全体」—ナシ（龍）▽うきなみ—うきは（東・富）
- 43 めくりきて—吹めくり（龍・東・富）▽からことの音—ことの
音かよ（龍）・かよことの音（東・富）
- 44 見る—降（龍）▽雪—雲（龍）
- 45 きなる—本ノマ、なる（龍）
- 46 「和歌全体」—桐の葉よはひろの椎かけうつす山下水にやとり
所か（龍）
- 48 吹保登波楚禮土聞衣之音絶天風遠埋—吹保登波楚禮土聞衣之音フクホトハソツレトキコエシヤト
絶天風遠埋（東・富）
- 49 咲はなの—咲花を（龍）▽その□—その日（龍・東・富）▽い
ひけん—とひけん（富）
- 51 こ、ろ—こ、ち（東）▽捨てこし—捨てはし（龍）・捨てはし（東）
春かせに—奈風に（龍）
- 53 かえて—かへて（龍・東・富）
- 56 とはぬを—とわぬを（富）▽かくれかにして—かくれかるして
（東）
- 57 「第二—四句」—雲の梢をあらしこそ雲にはなもつ（龍）▽あ
らしこそ—あらしにそ（東・富）▽つとふなれ—つたふなれ
（龍・東・富）
- 58 空に—雲に（龍）
- 59 幾重か—幾重の（東）・幾重（富）
- 61 笠も新も—袖も新に（龍）・そもも新に（東・富）▽うつもれ
て—うちわれて（東・富）
- 64 新なりけり—新なりける（東・富）
- 65 しほくみて—しほひみて（龍）
- 66 うつつ—うつつ（龍）▽岸うつ—みねうつ（龍）・峯うつ（東・
富）
- 68 のこる—のこるイハハル（龍）・かはる（東・富）
- 70 「下の句」—ナシ（東・富）
- 71 秘歌三十首—瑠璃壺秘歌三十首（龍・富）・瑠璃壺 秘歌三十
首（東）▽須戸—ら松は—須磨のうらはに（龍）
- 72 わきまへかたし—無弁（龍）・無辨へ（東）・無辨（富）▽演で
—演らる（龍）・演ノブル（東）・演（富）▽はたつらに—ひたすら
に（龍・東）・なたすらに（富）▽うしと—そしと（龍）▽散
けれ—散らん（龍）・散けり（富）
- 73 返照常理—返照常理（龍）・返照常理ヲ（富）▽咲そえて—咲
そへて（龍・東・富）▽みえぬ—みへぬ（東・富）▽高加茂—
高賀茂（龍）▽命の—命之（龍）▽いさをし—いたをし（富）
- 75 み山の—こよひの（東・富）▽下條に—下染に（龍）・下條にカダ
（東）・下條（富）
- 76 生老病死の—生死病死（龍）▽情分□—情分（龍）・情分也（東・

- 82 足曳イ布の—足曳イ布の (龍・東・富) ▽ゆふ立—ゆふ定 (龍) ▽哥枕
- 81 雨そ—雨は (龍・東・富) ▽生天—生て (龍)・生天 (東・富)
 ちらぬるそ—ちらぬるそ (龍・東・富) ▽命なりけり—命れなりけり
 (龍)・也けり (東・富) ▽天育—天育 (龍)
- 80 立ぬるは—立ぬれは (東・富) ▽ちりや硯の—硯のうへのちり
 や (龍) ▽うへを—うへの (東・富) ▽屏—屏 (東)・屏 (富)
 ▽事成に—給ふなるに (龍) ▽穢—□ (龍) ▽フクコト—フク
 ト (東) ▽恐ルヘシ—可悲ノ (龍)・ナシ (東・富)
- 77 昔—ナシ (龍・東・富) ▽聖ノ御辭—ナシ (龍) ▽もしほ—も
 しお (富) ▽涙ノ瀟蠶衣／筑石ノ歌枕ニ非ス—涙浜延喜無名之
 哥枕に候ス (龍) ▽詠セサセ給フ—始テ詠給ふ (龍)
- 78 土筆は—土筆 (龍・東・富)
- 79 いつの日の—いつの時 (龍)・いつのとき (東・富) ▽いつの
 時にか—いつのときにか (龍・東・富) ▽むすふへき—むすふ
 へき (龍・東・富) ▽命や—命や (龍・東・富) ▽はても—は
 ても (龍・東・富) ▽卍マクす、この—卍マクすえの死しマク半 (龍)・
 卍マクす、也の (東)・卍マクす、也の (富) (*東・富ハ「也」ノ右傍ニ「此
 字ヨコニミレハリノ字也」ト) ▽ナシ—五三クマムスヒハ鬚半 (*右傍に「玉ノ古
 文字カ」ト) (東・富) ▽神事ハ—神事者 (龍)・神事は (東) ▽
 御影寫ラセ候也—御影の移らせ給ふ也 (龍)
- 83 ノ—哥枕 (龍) ▽躰モ—うた躰も (龍)・躰 (東・富) ▽常二
 非ス—常二ハ非 (東・富)
- 84 御哥躰—御神詠の躰 (龍)
- 85 なかしふる—なからふる (龍) ▽鳴ぬ間そなき—鳴ぬるはむ
 (龍)・鳴ぬ間ハ無 (東・富) ▽夜水鳥—夜の鳥 (龍)
- 86 藤壺ノ—萩坪の (龍) ▽思遣ツ、—思しやりつ、 (龍)・思し
 遣つ、 (東)・思し遣つ、 (富)
- 87 をとたえて—音信て (龍) ▽萩—萩 (龍・東)
- 88 聞は—きかは (東・富)
- 89 山の端の—山のはの (龍・東・富)
- 90 なに、—何そ (龍) ▽菌—菌 (龍)・菌 (東・富) ▽化シテ—
 化テ (龍・東・富) ▽只—只 (東・富) ▽腮—腮 (東)・腮 (富)
 ▽額—額 (東)
- 91 はらくと—ばらくと (東)
- 92 返照常理—返照常理 (龍)・返テ照ス常理ヲ (東) ▽勝る—残る (龍)
- 93 ▽入江の—入江に (龍)・命を入江の (東・富)
- 94 詠歌—御詠哥 (東・富)
- 95 おとつれ—をとつれ (東) ▽垣ね—かきゐ (龍) ▽文字又章子

神代ヨリ古人也—ナシ（龍）・^{アヤコ}文字又^{アヤコ}章子神代ヨリ故人ナリ（東）・^{アヤコ}文字又^{アヤコ}章子神ヨリ故人ナリ（富）

96 ゆの—句の（龍）▽教誡ノ—教誡之（龍）▽すつるな—すつな

（龍）▽神秘ノ—神秘之（龍）・神秘（富）

97 ものをしふひとの／すきみのいらん—ナシ（龍）・東・富）▽速

—連（龍）・速^{ハイ}（東）・速^{ハイ}（富）

98 ひくなれば—ひくろわは（富）

〈奥書〉

秘歌三十首—和歌卅首（龍）▽菅聖公—菅聖（龍）・東・富）▽

御心の—御心之（龍）▽よりと—よりと言（東）・富）▽准

らへ—准^ナらへ（東）・准^ナらへ（富）▽教ゆへし—教給ふ（龍）

▽しかあれとも—然有共（龍）▽調—調^{テウ}（東）▽曲高—たけた

かく（龍）・曲高く（東）・富）▽あわれなる—哀れ成（龍）・あ

はれ成（東）・富）▽おふる—おほる（龍）▽神ことを—神こと

我（東）・富）▽のみ—ナシ（龍）▽天満天—天満天^{アマノマツマ}（龍）・

天満天玉（東）・天満天玉（富）▽くまもなし—くまなし（龍）

▽神かたち—神影（龍）▽逢たてまつりけり—奉逢（龍）▽天

神の—ナシ（龍）▽お、く—多は（龍）・を、く（東）・富）▽

かけし—かけて（龍）▽神こそは—神そとは（龍）▽かうよう

の—かう^{ホクマ}よう^マの（龍）・かう^{ホクマ}よう^マの（東）・富）▽聖化—聖地（富）

▽昇天の—昇天之（龍）▽世の—世之（龍）▽大慈大悲の—大

慈大悲之（龍）▽唱へ奉る—奉唱（龍）・唱たてまつる（東）・富）

▽敬う—〇申（龍）・敬申（東）・富）▽日のもと—日本（龍）

▽あら人神と—あらひと神と（富）▽いわれん—祝れん（龍）・

いはれむ（東）・富）▽月雪に—月雪の（龍）▽現形し給ひ—現

形に給（龍）・現形し給（富）▽詠哥を唱ふる時は—ナシ（龍）・

詠歌をとなふるときは（東）・富）▽天神を—天満宮を（龍）▽

あかめ—奉崇（龍）▽やすらかにして—あらはにして（龍）▽

一首—二首（龍）▽御ちかい—御誓ひ（龍）・御ちかひ（東）・富）

▽よくきけり—能聞り（龍）▽三木—三木（東）・富）▽正二位

—正三位（龍）▽大蔵頭—大蔵卿（龍）・頭^カ（東）

〔為長系図〕（※龍谷大学本ニハナシ）

菅家二位—菅二位（東）・富）▽古人—古人^{フルンド}（東）・古人^{フルント}（富）

▽天平元賜菅原性—ナシ（東）・富）▽母伊氏—母ハ伊氏（東）・富）

▽孝標—孝標^{タカスエ}（富）▽定義—定義^{大学}（富）▽數世ニシ

テ菅家ヨリ出離ス—ナシ（東）・富）

〔付記〕東北大学附属図書館狩野文庫蔵本の本文に関する情報は、道真仮託歌集を専門に研究している山口正代氏に提供していただいた。記して御礼申し上げる。

**“Ruritsubo no Eika Hyakushu” (Collection, Kansubon
(Scroll-book)) An anthology of poems attributed to
Sugawara no Michizane**

- Reprinting and Bibliography -

Yoshinobu SENO

“Ruritsubo no Eika Hyakushu,” one of the poetry anthologies attributed to Sugawara no Michizane, has been reprinted from a kansubon (scroll-book) from the author’s collection, with bibliographical notes added.

This book is classified under the category known as “A-system” according to Professor Kazuto Takei’s research. Previously, there were only four known collections of Sugawara no Michizane’s works - the collections at Ryukoku University, Tohoku University, Jissen Women’s University, and Toyama City Library. The reprinting of this kansubon (scroll-book) marks the discovery of the fifth collection. The special characteristics of this book are that it is the only kansubon (scroll-book), and its transcript is from 1729, which is the oldest known transcript. The other transcript whose year can be identified is the one at Tohoku University, which is from 1753.

The differences in the text between three of the collections, excluding the Jissen Women’s University’s collection, are described at the end of the book.